財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第11集

広島城跡（中堀跡）

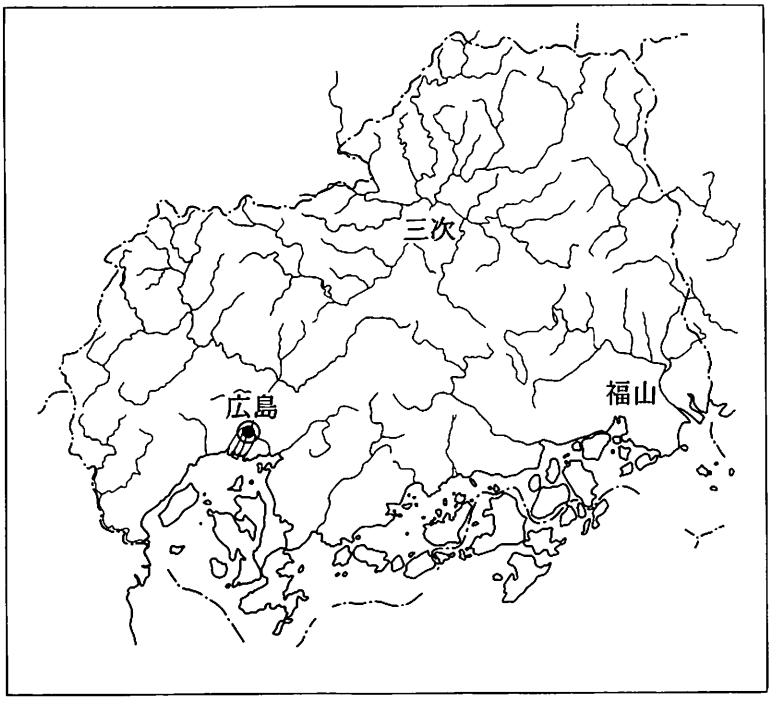
（仮称）広島県交通管制・留置センター建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

財団法人 広島県教育事業団

広島城跡（中堀跡）

（仮称）広島県交通管制・留置センター建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書



遺跡位置図（◉が遺跡）

2005

財団法人　広島県教育事業団

例　言

1　本書は，（仮称）広島県交通管制・留置センター建設工事に伴って，平成１６（2004）年度に発掘調査を実施した，広島市中区基町所在の広島城跡（中堀跡）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，広島県警察本部から委託を受けて，財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が実施した。

3　発掘調査は，辻　満久・沢元保夫が担当した。

4　出土遺物の整理，復元，実測，図面の整理，写真撮影などは，上記の発掘調査担当者のほか，古瀬裕子が行った。

5　本書は，古瀬が執筆し編集した。

6　陶磁器の同定については，佐賀県有田町教育委員会学芸員の村上伸之氏および広島市文化財団の福原茂樹氏のご教示を受けた。

7　図版の遺物番号は挿図の遺物番号と同一である。

8　第１図は，広島市都市整備局都市計画課発行の１：2,500 の地形図を複製した。

9　本書に使用した方位の北及び座標値は，平面直角座標系第Ⅲ系による。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　歴史的環境及び既往の調査 …… 2

Ⅲ　調査の概要 …… 6

Ⅳ　遺構と遺物 …… 6

Ⅴ　まとめ …… 10

挿　図　目　次

第１図　広島城跡及び広島城跡関連遺跡分布図（１：10,000）…… 3
第２図　広島城城郭図 …… w4
第３図　調査区内遺構配置図（１：200）…… 7
第４図　石垣実測図（１：30）…… 8
第５図　出土遺物実測図（１）（１：３）…… 9
第６図　出土遺物実測図（２）（１：３）…… 10

図　版　目　次

図版１　a　調査前全景（南から）
　　b　石垣全景（東から）
　　c　堀跡検出状況（西から）
図版２　　出土遺物（１）
図版３　　出土遺物（２）

Ⅰ　はじめに

この発掘調査は，広島県警察本部（以下「県警本部」という。）が計画している（仮称）広島県交通管制・留置センター建設工事に係るものである。

平成15（2003）年2月3日付けで中国財務局から広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に対し，国有地売払にあたって当該地内の埋蔵文化財の有無及び取扱いについての協議がなされた。売り払い後は（仮称）広島県交通管制・留置センターの建設用地となるとのことであった。

県教委はこれに対し同月，当該地内では遺跡の有無を確認するために試掘調査が必要な旨を回答し，その後試掘調査を実施した。その結果，広島城跡（中堀跡）を確認したので，この取扱いについて県警本部と県教委は協議を重ねたが，現状保存は困難との結論に達し，事前の発掘調査を行うこととなった。

平成16(2004)年3月5日付けで県警本部から財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室(以下「事業団」という。）に調査依頼があり，これを受けて事業団は県警本部との間で発掘調査の委託契約を結んだ。

調査は，平成16年4月12日から開始し，4月21日にすべての調査が終了した。

なお，発掘調査にあたっては，県警本部，広島県教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

Ⅱ　歴史的環境及び既往の調査

1　歴史的環境

広島城は太田川河口のデルタ上に築城されている。城は南を正面とし，本丸・二の丸を中央に置き，周りを内堀で囲み，次に三の丸が南側に配置され，その外側を中堀がめぐる。この外側と北側に外郭があり，この周囲に外堀を構える。西側の外堀は本川が兼ねていた。三重の水堀が巡っていたのである。今回発掘調査した個所は，広島城中堀の東南隅にあたる。正保年間（1644～1647年）に作成された「安芸国広島城所絵図」によれば，石垣の上に隅櫓が築造されている。中堀の幅は19.7 m，深さ1.9 mとされる。

さて広島城は，毛利輝元が天正16（1588）年上洛し，聚楽第や大坂城とその城下町をみたことがきっかけとなり，郡山城に替わる新しい城の建設の必要性を痛感したと考えられ，翌天正17年から普請を開始したとされている。天正20（1592）年に豊臣秀吉が来城した際にはある程度完成していたと思われる。

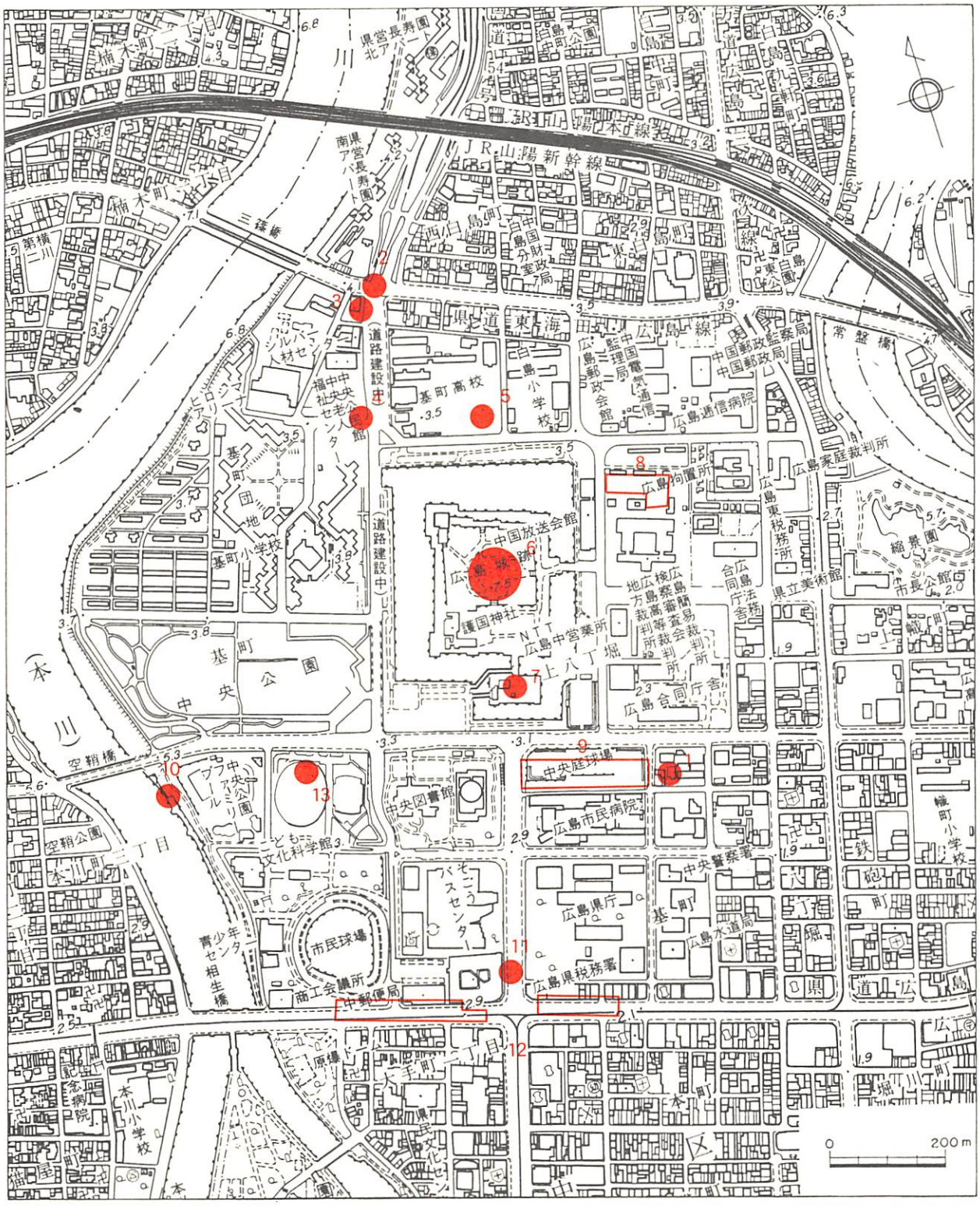
毛利輝元は関が原の合戦に敗れて慶長5（1600）年に周防・長門に移封される。その後に尾張から福島正則が入封。その改易を経て元和5（1619）年浅野長晟が紀州から入封する。広島城は毛利・福島・浅野の三時代を経て明治を迎える。

広島城は，明治4（1871）年廃藩置県の後に本丸に仮の県庁が置かれたが，同年鎮西鎮台の第一分営が本丸に置かれることとなり，県庁は三の丸に，その後小町へ移った。明治6年には第一分営は第五軍管広島鎮台，明治19年には第五師団となり，練兵場が城内に創設されるなど次々と軍事施設が設置され，明治27・28年の日清戦争の際には本丸に大本営が設置された。

明治42（1909）年頃中堀・外堀の一部の埋め立てが始まり，東側の中堀すなわち本調査区の北への延長部分はこのときに埋められたと思われる。昭和3年発行（大正１４年測量）の２万５千分の一地形図では南側中堀の西側は埋められ，中堀は北側の東・西，南側中堀の東半分となっている。昭和28（1954）年撮影の航空写真では内堀及び中堀の北東部分を残して堀はすべて埋められている。

参考文献

・秋山伸隆「広島城の４００年」『図説広島市史』広島市　1989年
・財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城中堀跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第5集　1992年
・財団法人広島市歴史科学教育事業団 広島城『広島城の堀』　1994年



第１図　広島城跡及び広島城跡関連遺跡分布図（１：10,000）

１　調査地点（中堀跡）　２　城北駅北（旧西白島）交差点地点（外堀跡）　３　北西隅櫓台跡　４　基町高校前交差点地点（中堀跡）　５　基町高校グラウンド地点（武家屋敷跡）　６　史跡広島城跡本丸跡　７　史跡広島城跡二の丸跡　８　土塁跡　９　中央庭球場地点（中堀跡）　10　外郭櫓台跡　11　県庁前地点（武家屋敷跡）　12　地下街地点（外堀跡）　13　県立体育館地点（中堀跡）

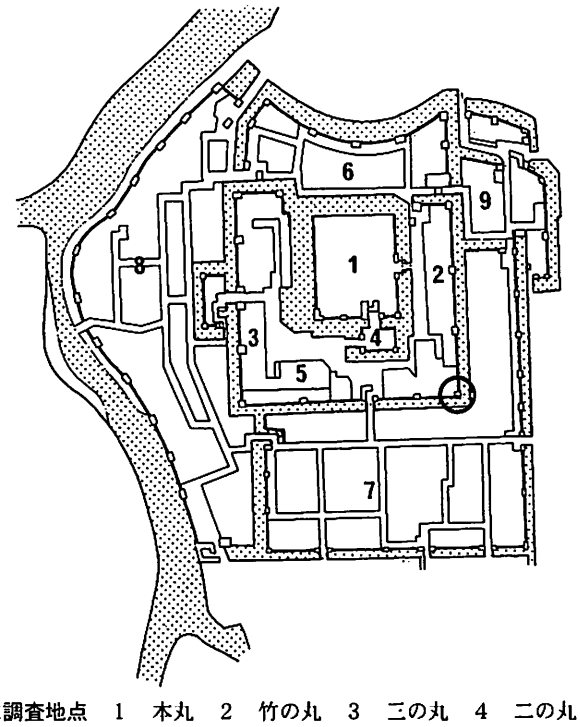
2　既往の調査

広島城やその周辺では昭和54（1979）年から発掘調査が行われている。河川の整備や新交通システム建設といった社会資本の整備のための事前調査がほとんどであるが，保存整備を目的とした調査もあわせて行われている。

昭和54年度には太田川護岸改修工事に伴って外郭櫓台跡の調査が行われた[1]。櫓台石垣に福島正則が支城として築いた大竹市小方（亀居）城の石垣と同じ刻印があること，また絵図の比較によりこの外郭櫓台は福島正則が築いたとしている。

昭和62・63年度には史跡広島城跡保存管理計画策定の一環として二の丸跡の調査が行われた[2]。調査では表御門・平櫓・多聞櫓・太鼓櫓の礎石等が確認され，天正から慶長年間に生産された陶磁器や金箔瓦が出土したことなどから二の丸が毛利時代に存在していた可能性が指摘された。この調査の成果と昭和9年の測量図から平成6（1993）年には表御門・平櫓・多聞櫓・太鼓櫓の建物が復元された。

平成2年度から7年度には新交通システム建設工事，幹線共同溝設置工事及び国道54号改築工事に伴って，武家屋敷跡，中堀跡，外堀跡の北西隅櫓台の石垣などが調査された[3]。屋敷跡は外郭内で最南端の屋敷地の調査であったが，境界と考えられる溝が確認された。外堀跡の北西隅櫓台では，櫓台の石垣とともに対岸の北側や西側の石垣が確認され，北西隅においてある程度正確な城郭ラインが描けることとなった。平成2年度には県立体育館の工事現場で中堀跡の西隅櫓台石垣が発見され，基底部に胴木が埋められていたことが確認された[4]。



○は調査地点　1　本丸　2　竹の丸　3　三の丸　4　二の丸
5　内大手郭　6　北の丸　7　大手郭　8　西の丸　9　北の郭

第2図　広島城城郭図

（広島県教育委員会『広島城外郭櫓跡発掘調査概報』1980年から転載）

平成3年度には中央駐車場建設に伴って中堀跡が調査された[5]。高さ1～1.5mの石垣が幅約20m，総延長200mにわたって確認され，さらに調査区中央部北側で中堀に突き出た櫓台石垣も併せて検出された。この中堀跡では，中堀西隅櫓台石垣の基底部のような胴木が使われず，自然堆積層に直接石垣が積上げられていた。

平成8・9年度には地下街建設工事に伴って外堀跡の調査が行われた[6]。外堀の南北石垣とともに大手門にあたる「壱丁目口御門」，「麿屋町口御門（真鍋御門）」の櫓台石垣，及びそれに伴う土橋が確認された。金箔瓦の出土や壱丁目口御門櫓台の下で検出された石垣などから，外堀が毛利時代に整備された可

能性がでてきた。

平成9年度には市立基町高等学校改築工事に伴って北の丸の武家屋敷地の調査が行われた[7]。近世や近代の建物跡や溝跡・井戸跡などが確認された。

平成8年度から14年度には史跡広島城跡本丸遺構保存状況調査が実施され，中御門跡，米蔵跡，冠木門跡，裏御門跡，御殿跡，石垣，櫓跡などが調査された[8]。築城時の地層が確認され，地盤は従来考えられてきた以上に強固であることが明らかとなった。

註

（1）広島県教育委員会『広島城外郭櫓跡発掘調査概報』1980年

（2）広島市教育委員会『史跡広島城跡二の丸第一次発掘調査報告』広島市の文化財第42集　1988年
広島市教育委員会『史跡広島城跡二の丸第二次発掘調査報告』広島市の文化財第44集　1989年

（3）財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第6集　1992年
財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀跡西白島交差点地点』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第9集　1993年
財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀跡県庁前地点発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第12集　1994年
財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城関連遺跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第15集　1995年
財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀跡城北駅北交差点地点発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第18集1997年

（4）広島県教育委員会「緊急発掘調査概要」『広島県の埋蔵文化財』広島県埋蔵文化財保護行政資料3　1992年

（5）財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城中堀跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第5集　1992年

（6）財団法人広島市文化財団『広島城外堀跡　紙屋町・大手町地点』（財）広島市文化財団発掘調査報告書第1集　1999年

（7）財団法人広島市文化財団『広島城遺跡－基町高校グラウンド地点』（財）広島市文化財団発掘調査報告書第3集　1999年

（8）財団法人広島市文化財団『史跡広島城跡本丸遺構保存状況調査報告』（財）広島市文化財団発掘調査報告書第10集　2004年

Ⅲ　調査の概要

今回調査を行った地点は広島市中区基町７番４号に所在し，広島城中堀の南東隅にあたる。

調査は，先に実施された試掘調査の成果を踏まえて，まず南東隅の石垣の検出確認作業から開始した。一帯はビルが建ち並ぶ官庁街であり，石垣が検出された場所が隣接地との境であったことから全容は明らかにできなかったが，３段以上の石垣があり，隅部が算木積みになっていることが確認できた。

今回の調査地点は，平成３年度に財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下「広島市事業団」という。）が調査した中堀跡(註)に連続する位置にあたり，調査地点が石垣のコーナーに相当すること，石垣の石材や積み方などの特徴が西側の中堀跡で検出された平櫓のそれに似ていること，東側に堀が存在すること，また城郭絵図類との対照などから，この石垣は正保年間に作られた「安芸国広島城所絵図」に描かれた中堀南東隅櫓の櫓台石垣の一部と思われる。

次に，石垣部分の外側（東側）に広がる中堀跡の堀底を明らかにするため，石垣に直交するトレンチを設定した。隣地に接近し，湧水と崩落のため明確ではないが，現地表下 3.1 m（標高－1．57 m）が中堀跡の堀底と考えられる。

遺物は堀の埋土中から陶磁器や瓦破片などが出土した。

（註）財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城中堀跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第５集　1992 年

Ⅳ　遺構と遺物

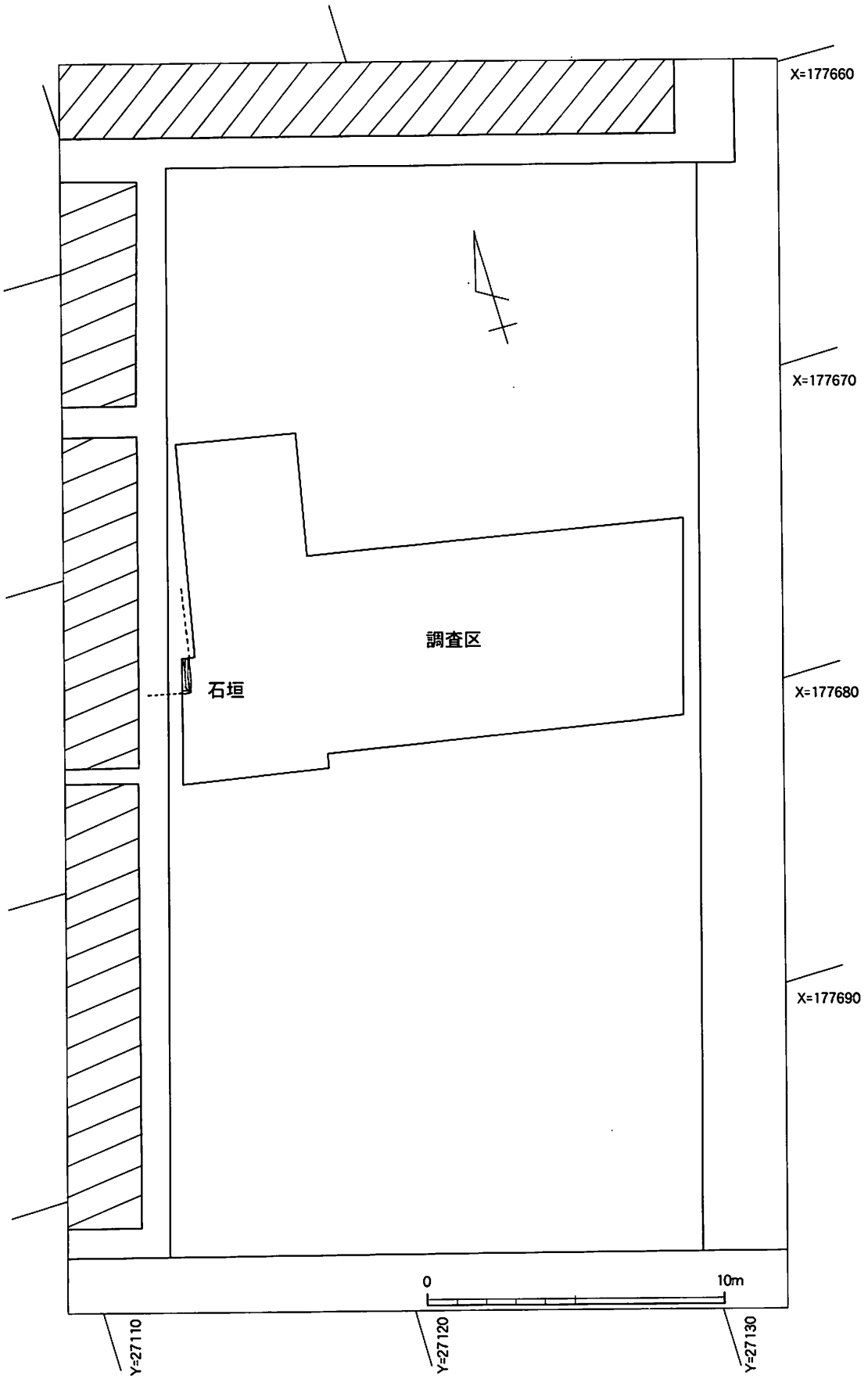
１　遺構

石垣（第４図）

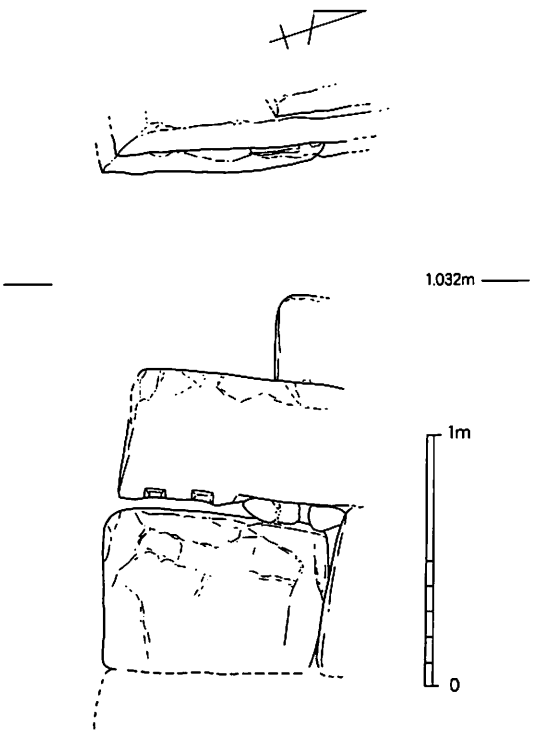
調査地のほぼ中央西側の隣地との境界付近で石垣を検出した。これは，中堀の南東隅の石垣にあたると思われる。隣地との境界に近接しているため，調査地内の堀跡の全容を明らかにすることはできなかったが，隣地との境界に建つブロック塀に平行するように石垣が延びていると思われる。

検出した石垣は少なくとも３段以上で，直方体の石材を交互に直交させながら隅部を作り出す「算木積み」で，広島城の他の石垣の隅部でも使われている積み方である。石材の分割時の矢穴がみえるものもあって，矢穴には小礫をかませて石材の安定を図っている。勾配は約80°である。なお，石垣の基底部に胴木など基礎を固める木材等は確認できていない。

広島市事業団が中堀跡の調査で検出した櫓台石垣は，石積みが根石から２段から４段遺存していた。隅石には矢穴痕が残る切り割り石を用い，勾配は 75°と 80°である。隅部の積み方は「算木積み」であるが，隅石の小口と脇石が整然とした配列をみせる完成度の高いものではなく，石



第３図　調査区内遺構配置図（１：200）



第４図　石垣実測図（１：30）

の形状がまちまちで隙間に多くの詰石を施している。これらの特徴は本調査地の石垣にも共通するものである。また，広島市事業団が調査した中堀跡の石垣及び櫓台石垣には胴木による基礎は施されていなかった。

堀

現地表下 2.3 mで堀を埋め立てた砂から淡黒褐色の粘性の強い土層になる。この層が堆積物が沈澱した中堀の堆積層と思われる。激しい湧水のため層の厚さは確認できなかったが，試掘棒で約 0.8 m の深さで質の変化する土層にあたるので，おおよそ現地表下 3.1 m（標高－ 1.57 m）が堀底と思われる。

広島市事業団の中堀の調査では堀底の深さは標高－ 1.2 m～－ 0.88 mであった。今回の調査区の堀底はこれらより若干深くなるがほぼ同程度のものである。これらの差が，堀の築造時の掘削の違いによるものか，堀の経年の変化または堀浚えによるのかは不明である。

2　遺物（第５，６図）

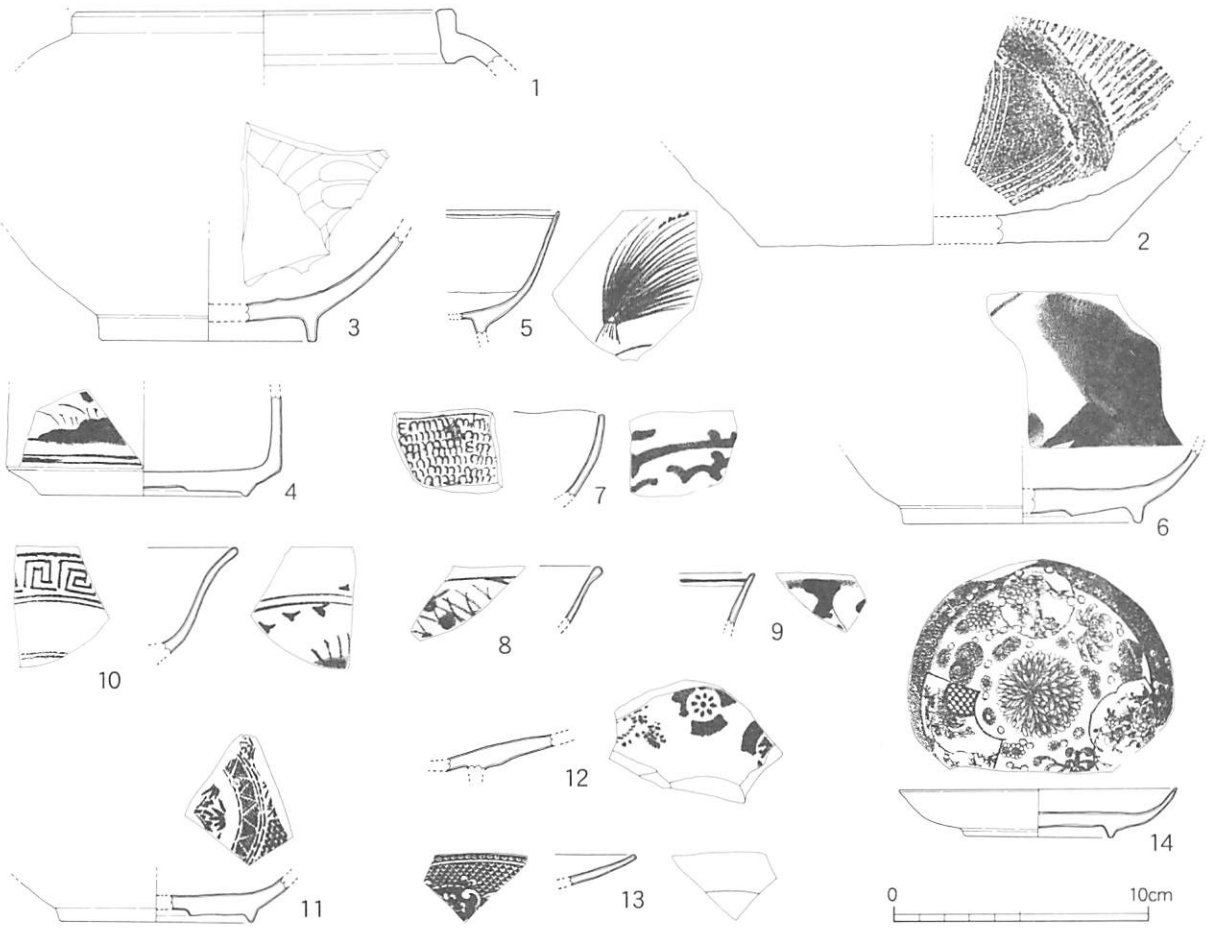
遺物は堀の埋土中から陶磁器片・瓦片・木片等が出土したが，中堀が埋められたのが昭和年間であることから，近世から近代のものまで出土している。

瓦質土器　１は瓦質の壺口縁部の破片。復元した口縁径は約 15 cm。外表は暗灰褐色を呈し，瓦質で胎土は緻密である。細かなナデの後，外面は磨きを施す。時期，産地ともに不明。

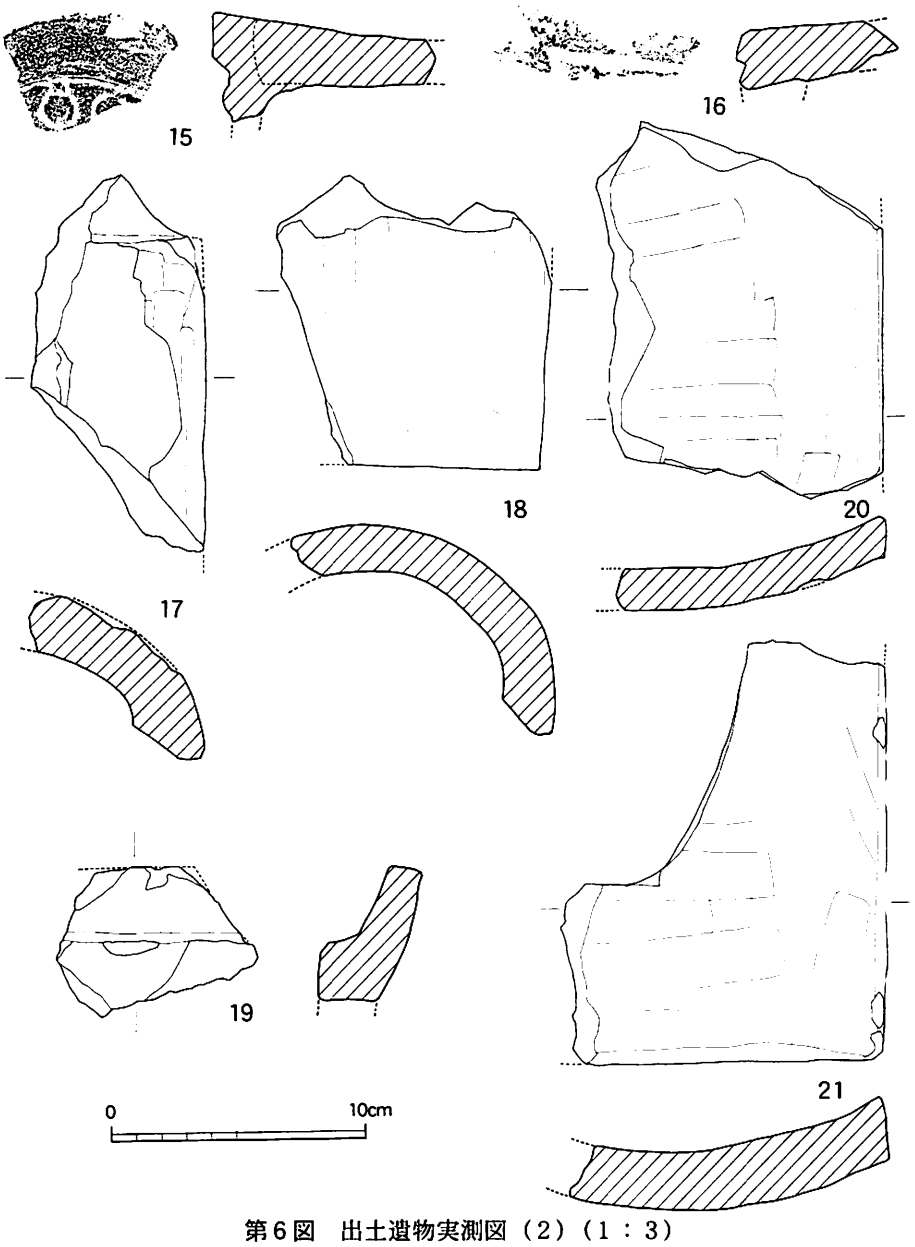
陶磁器　２は擂鉢の底部と胴下部の破片。底径約 14 cmに復元できる，中型の擂鉢。外面は赤褐色，内面は灰赤褐色を呈し，色調からは備前焼の趣がある。しかし，見込みの擂り目が反時計回りに円を描くように施されており，この特徴から 19 世紀代の明石焼の可能性が高い。３は深めの白磁皿。内面に花弁様の隆起文様が施される。19 世紀の作であろうが，国内のいずれの産地かは限定できない。４は火入。底部の高台の径は約８cm。内面見込みに釉は掛けられておらず，内面で火を使う容器である。19 世紀の作であろう。５は薄い造りの小型の碗。外面に束ねた草のような文様がある。製作時期は 19 世紀前半期，1810 ～ 1860 年代に間に収まる。産地は肥前。６は深めの皿。底部の高台径は約 9.5 cm。内面に山水文様が施される。19 世紀の作であるが，幕末に近い頃と見られる。産地は特定できない。７は皿。内面には細かな釣り針形の手書き曲線文が連続する。型打ちによって，口縁端部を波打たせ，碗部を花形にする。19 世紀，幕末期の作であるが，産地は不明。８は深めの皿。口縁端部を玉縁状に肥厚させる。薄い造りである。

19 世紀，幕末期の作と見られる。産地は不明。9は小型碗。湯呑み茶碗に類する。薄い造りである。19 世紀，幕末期の作と見られる。産地は瀬戸か。10 は皿あるいは碗。外面には列をなして飛ぶ鳥，内面には雷文と，器面の両側に顕著な文様が施され，皿とも碗とも見える。皿とすれば深めの皿である。19 世紀，幕末期の作であり，産地は不明。11 は皿底部の破片。高台径が約 7.5 cm。型紙刷りによる動きの感じられない文様をもつ。見込み部に釉が径 3 mmの円形にはがれたところがあり，これは窯道具の足付きハマの痕であろう。明治時代末から大正時代頃の作。12 は碗か。底部周辺の破片。底部周辺が平坦な造りで，器形は碗と思われるが不明。外面に型紙刷りによる，スタンプ文のような規則的な文様を施す。明治時代から大正時代の作であろう。13 はやや厚めの造りで，浅い皿。外面には淡い青で条線を一条施す。内面の文様は銅版転写によるもので，大正時代から昭和時代初期の作と見られる。14 は径 11 cmの浅い皿。菊花文を銅版転写で施す。大正時代から昭和時代初期の作であろう。

瓦　数十点出土したが，軒瓦は 2 点にすぎない。火を受けて赤変しているものもある。15 は軒丸瓦で，外区内縁の珠文が 2 個確認できる。珠文の直径 1.1 cm，高さ 0.5 cm。外区外縁の幅 1.9 cm，高さ 0.5 cm，瓦当の厚さ 1.7 cm，丸瓦の厚さ 1.7 cm。裏面には瓦当面と丸瓦を接合して指でナデつけた痕がみえる。凹部にはヘラ削り痕跡が顕著。胎土は灰色，色調は黒灰色である。16 は，軒平瓦で，周縁の上部幅 1.2 cm，高さ 0.3 cm。胎土・色調ともに灰色である。17 は丸瓦



第 5 図　出土遺物実測図（1）（1：3）



の筒部から玉縁にかけての破片。厚さ 2.3 cm。胎土は灰色，色調は黒灰色である。18 は丸瓦筒部の破片で厚さ 2.0 cm。凹部にはヘラ削り痕跡が顕著。胎土は灰色，色調は黒灰色である。19 は丸瓦の筒部から玉縁にかけての破片である。厚さ 2.2 cm。胎土は灰色，色調は茶灰色である。20 と 21 は平瓦で厚さは 20 が 1.5 ～ 1.8 cm，21 が 2.2 cm。凹部にはヘラ削り痕跡が顕著。胎土は灰色，色調は黒灰色である。

第 6 図　出土遺物実測図（2）（1：3）

V　ま　と　め

今回の調査では，石垣の隅部とその東側に堀跡を検出した。石垣は少なくとも 3 段以上積まれ「算木積み」によって隅部を作り出している。調査地点が，平成 3 年度に財団法人広島市歴史科学教育事業団が調査した中堀跡の東側に続く位置にあたり，石垣のコーナーに相当することや石垣の石材や積み方などの特徴が西側の中堀跡で検出された平櫓のそれと似ていること，また城郭絵図類との対照などから，この石垣は正保年間に作られた「安芸国広島城所絵図」に描かれた中堀南東隅櫓の櫓台石垣の一部と思われる。

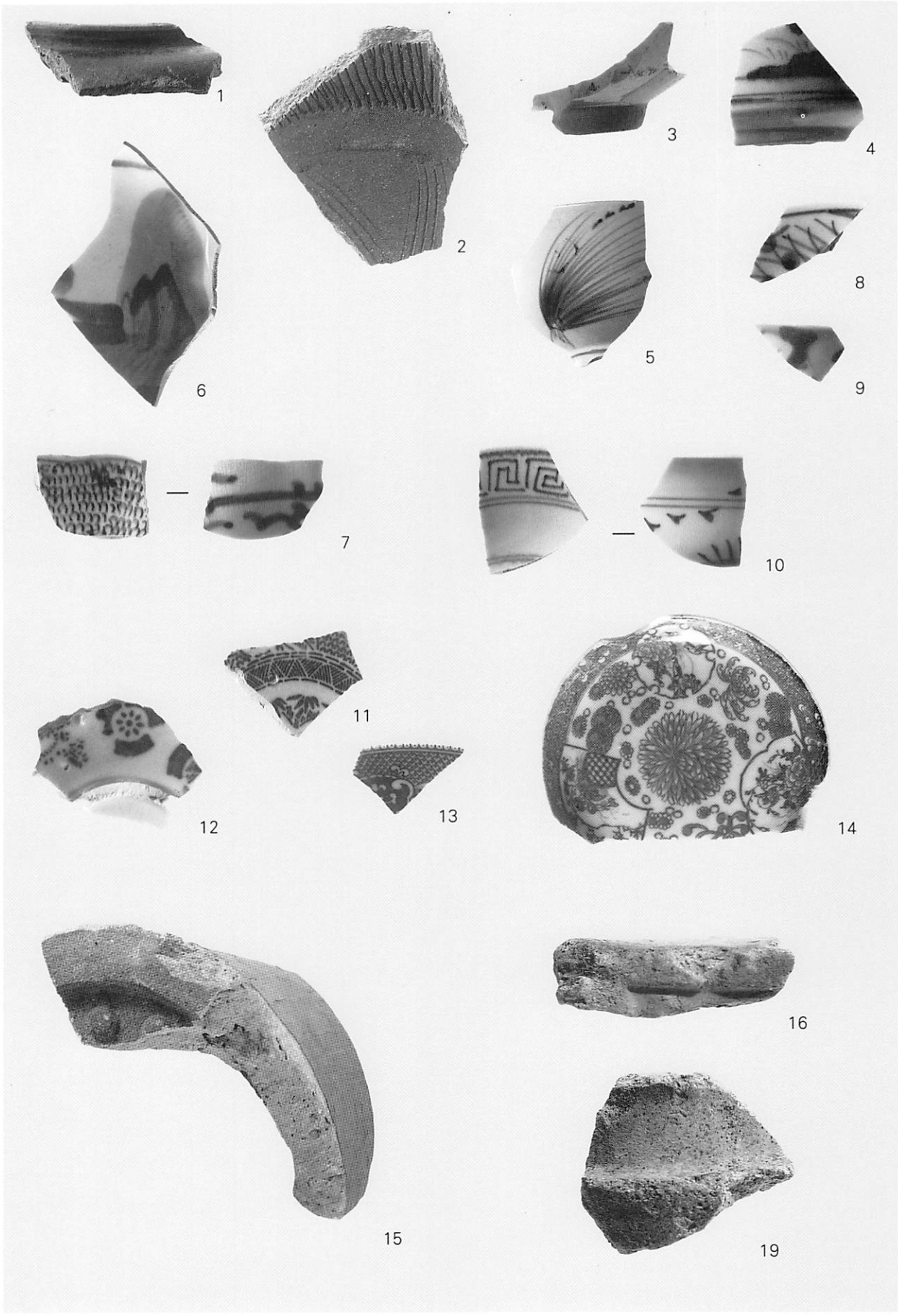
図　　版

図版1

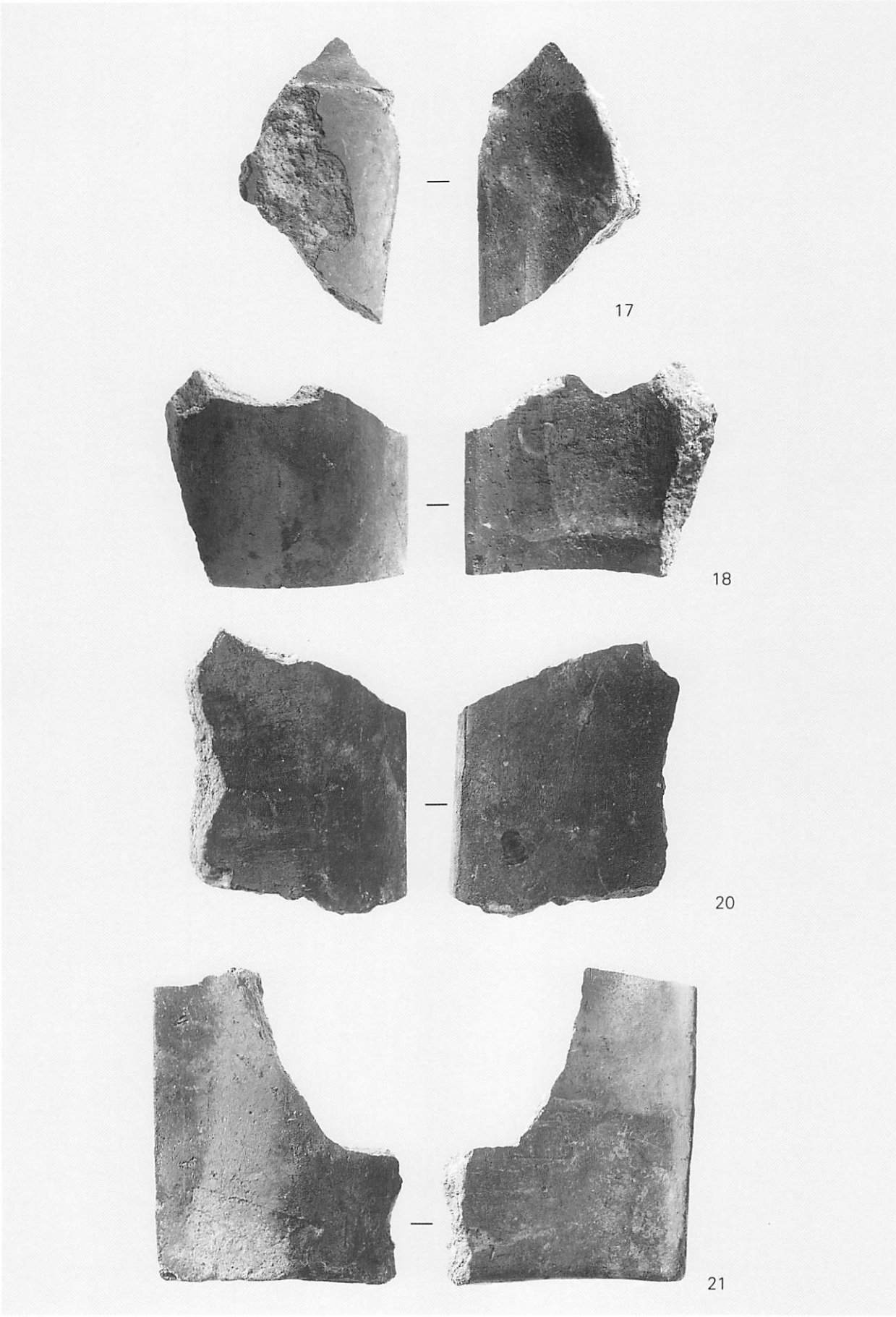
a　調査前全景（南から）

b　石垣全景（東から）

c　堀跡検出状況
（西から）



出土遺物（1）



出土遺物（2）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひろしまじょうあと（なかぼりあと）
書 名	広島城跡（中堀跡）
副 書 名	（仮称）広島県交通管制・留置センター建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告
巻 次	
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第11集
編 著 者 名	古瀬裕子
編 集 機 関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所 在 地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号　ＴＥＬ082－295－5751
発行年月日	西暦　２００５年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひろしまじょうあと 広島城跡 なかぼりあと （中堀跡）	ひろしま し なか く もとまち 広島市中区基町	34100	860	34° 23′ 52″	132° 27′ 41″	20040412 ～ 20040421	38	（仮称）広島県交通管制・留置センター建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広島城跡（中堀跡）	城跡	近世	石垣	瓦・陶磁器	「安芸国広島城所絵図」記載の中堀南東隅櫓の櫓台石垣検出

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第11集

広島城跡（中堀跡）

（仮称）広島県交通管制・留置センター建設工事
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 日　平成１７(2005)年３月３１日

編　　集　財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL　(082)295-5751　FAX(082)291-3951

発　　行　財団法人　広島県教育事業団
〒730-0011　広島市中区基町4番1号
TEL　(082)228-8451　FAX(082)228-8441

印 刷 所　朝日精版印刷 株式会社
TEL　(082)277-5588　FAX(082)277-1143